

第三章

初めて書く人のために

1 恐れずに書くこと

先日、ある歌会に行きましたら、Yという女性がもう半年も歌会にきているのに、まだ歌を出したことがないということでした。Yさん、人の歌の批評、感想を言うときは、みんなが感心するほど洞察力も深く、思いやりもあり、感受性も優れています。

しかし、「どうしても書けない、書くとき長くなって…」と言われます。「あなたは完璧主義なの？」「一発で決めたいのかな」と私がいいますと、「いえいえ、完璧主義ではありません」と言います。

この人は、ものを思うことも出来、ものを見たり聞いたりすることで理解する能力もあり、口で話すことも上手、しかし、書くとうまく行かないのではないかと恐れているのです。

Yさんの場合は、自分が書けるようになったらどんなにいいかと思って、書かなくとも歌会にくるくらい熱心ですから、いったん書き始めたらどんどん書くと思われませんが、大勢いる人の中には、自分には詩歌というものは駄目と思いついている方ももちろんおられます。

やはり、詩歌は特別な人のやるものだという考えもあるのでしょうか。たまたま体の弱い人が運動などが出来ないために本を読んだりするうちに、詩歌を書いてみたりする、というように、どちらかといえば、詩歌を書く人のほうが、欠陥を持っているような気もするのですが、詩歌

に対するコンプレックスを持っている方もおられるようです。

しかし、案外、人はよい感性を持っているもので、たまたまそれを表していないだけで、「自分は感性がない」などと思いついて入っている方が多いのです。

感性なしには、人と付き合うことも出来ないし、子育ても出来ないし、いろいろな仕事もできないでしょう。感性というものは、人間の関わる重大なことには必ず関わってくるものです。なぜなら、感性は物事の価値を決めるものだからです。

人が好きになる、音楽が好きになる、仕事が好きになる、土地が好きになる、これらは全部感性のしわざです。

ですから、感性を働かせない人生などはありません。その感性で感じていることを書きつけるのが詩歌です。それを思いを通して書く、と言ったほうがいいでしょうか。

その思い、感じていることを、絵や音楽で表す方もいます。しかし、私たちは言葉を使ってコミュニケーションしていますから、どの人も必ずと言っていいほど、その感性や思いを人に伝えているのです。

詩歌を書くということは、これを文字に表して表現するものです。

Yさんには、「あなたは話していることは素晴らしいから、話すように書いたらどうでしょう」といいますと、「いやいや、駄目です」と首を横に振ります。いよいよ書き文字による詩

歌を特別なものと思い込んで恐れているのです。

「そんなに一つの歌に賭けないほうがいいですね。十、二十と書いて一つよければいいというくらいに思って下さい。私は月に百も書いて、一つか二つよければいいかなと思っているのです」

これは事実です。私は月に百は書きますが、いいものは一つあればいいほうです。

五十年やった私もいい歌を書くには、月に百も書いて、九十九は駄目だと思いつめているのです。だから自分に能力がないとも思わず、出来ないとも思わず、人に「いい」とほめられることがなくても、營々と書き続けているのです。最近では、私の歌をほめてくれる人はいます。

よくて当たり前だから、あえてほめないと、みなさんは言われます。とは言うものの、私は人がほめないで、ほんとうは駄目なのではないかと思ってもいるのです。

他の方ならなおのことでしょう。人間は貪欲なもので、いくらほめられても足りないし、ほめ方も最高でなくては不満足です。

ほめられても、ほめ方が気に入らないというくらい、わがままなのが私たちです。

また一方で、不安、恐れ、おびえに震えている人もいます。馬鹿にされるのではないか。恥かしいのではないか。このために、書けないと思いつんでいるのです。

とにかく書いて目を瞑って歌会にでも出してみるのが第一歩です。この一歩を踏み出さないと始まりません。

私たちにとって、何事も最初はそうでした。何をしても最初は震えます。私は、十八歳のとき東京に出てきましたが、当時の公衆電話の赤電話で十円を入れて、親戚に電話をかけるとき手が震えました。人がみなそうしているのを見てからやっているものの、ガタガタ震えるので

す。

こういうのは、七十になっても直りません。私は今、よくアメリカへ行くのですが、アメリカの公衆電話でまだ電話をかけたことがあります。もしかけたら、震えると思います。ニューヨークの地下鉄には、三度ほど乗りましたが、最初にチケットが買えたときは、いい大人三人で握手して喜びました。

とにかくやってみて、OKならば、次第になんということもなくなってきます。

五行歌を書くことも、最初の電話や英会話と同じようなものでしょうか。

一線を越えてやってみることが大切です。

ある人は、こんなふうに最初の人に言っています。

腹減った

何か

食いたい

……

……

「腹減った。何か食いたい、でもう三行になっているのだから、あと二行付け足せば、それで五行歌になる。やってごらん」

そのとおりなのです。たとえば「ごはん／残ってないか」でもいいし、「ラーメン屋／ない？」でもいいし、「寿司が／いいな」でもいいのです。寿司はカツでもカレーでもパスタでもなんでもいいでしょう。

また、自分で最初の二、三行、課題に当たるところを考えたとしたら、それはもう自作の五行歌ということになります。「もう／夕方か」という二行、「ああ／あの人／やっと思い出した」という三行、「これでよし／終わったことにして／もう」という三行のあとを、書いてみるといいと思います。

五行歌のよしあし？ そんなこと知るか、と思っているのがいいと思います。よしあしの

判定は、人によって異なります。現在のところ、五行歌の世界は私の審判によってよしあしを決めて行っているといえますが、書く人が一作、一作、ベストでないといけないと思っているとしたら、私は笑うと思います。

自分が百書いて一つであるだけでなく、よほどいいうたびとがよほど調子のいいときでなく
ては、十首書いて五首がいいということはあり得ません。十首中、二、三首でもいいとびっ
りするようなことです。

しかし、始めたばかりの人が、そういう人のものよりもよいものを書くということもあり得
ます。

書きたくないと思っても、五行歌は簡単に書けます。その気持ちを書くといいのです。

五行歌なんて

書きたくない

ぜったいいやだ

と思ったら

もう書けていた

これは学校で先生に言われて書いた小学校四年生の五行歌です。もちろん、これでいいのです。とにかく、恐れないことが大切。最初がどんな歌でも、気にすることはありません。むしろ、一番最初のものが名作と言われると、後で苦しむとも言われます。

2 歌の長さ —— 短い、長い、どちらがいいか

結論を言えば、五行歌には短くていいものと、長くていいものがあり、どちらもいいものはよく、悪いものは悪いということになります。一般的な傾向として初心の頃は長くなりすぎるということがあります。ここに長短四つの例を挙げます。

A 話しているその人の言葉、用語から

その人がどういう本を読んで基礎知識を形作ったかがよくわかるものだ

だからよく学んだ人同士の話ではとくに話さなくても

何冊かの本が二人の頭の中で開いたり閉じたりしているものだ

B よく勉強した人同士

話し合おうと

何冊かの本が

双方の頭の中で

開いたり閉じたりする

C 同じ本を

読んできた

者同士

話すと

わかりがいい

D 同じ

本を

読んで

きた

仲

これは、同じテーマで四種の長さで私自身が今サンプル用に書いたものです。百二十三音、五十二音、二十六音、十三音と、それぞれ長さが違います。どれがいい、悪いということもないように思われます。四種類のよさ（悪さ）があるとも言えるでしょう。物事は、なんでもそういうものです。

しかし、五行歌の世界では、やはり「長い」ということを苦にする人は多いように思われます。といたしますのも、長いほうは簡単で、短くするほうが難しい、ということがあるからです。長いものを書くには、なんでもいろいろ書いてしまえばいいということがあります。

みなさんも、最初に五行歌を書かれるとき、五行に自由でと言われますから、おおかたは長くなります。五行歌は平均すると二十九音くらいのものが多いのですが、最初に書くものは平均して三十五、六音はあるのではないかと思えます。

「自由」というと、人はなんでもやや多めに使います。お金でも、料理の材料でも、話す時間でも、自由といわれれば、多めになり、長めになります。

しかし、多めの場合がいい場合もある。少なめの場合がいい場合もある。そういう関係に似

てはいますが、五行歌の場合、あまり長いものは本義にもとるところもあるのです。

日本の短詩の本義

それは日本短詩の本義ともいべきもので、短詩型はもともと短く引き締めることで成立したという事情があります。日本の詩歌の初めである古代歌謡（上代歌謡ともいう）は、短いものが多く、四五％は五句構成で、その五句の平均は二十九音です。和歌は三十一文字ですから、その二十九音を二音分引き伸ばしたものです。

五行歌ではその五句を五行に表す詩型ですが、句と行とは本来同じものではありません。日本の場合の句は、一音から十音くらいまでの短いものであり、漢詩の場合、西洋詩の場合でも一行は、日本の場合の句をすくなくとも二句か三句含むものです。

日本の感覚でいいますと、行は句の二、三倍あることになります。

ところが、「句」という言葉ももともとは中国語で、これが漢詩とともに日本にきたときは、中国の五言、七言のことを指しました。中国の場合の五言、七言は日本の詩歌の二、三句分を含みます。